



上川井だより

2月号

平成30年 1月31日
横浜市立上川井小学校
校長 山田 アイ子

「オリンピック選手から学ぶこと」

副校長 山本 美和

2月9日（金）～25日（日）まで、韓国の平昌（ピョンチャン）で第23回冬季オリンピックが行われます。連日ニュースでは何かしらオリンピックの話題が取り上げられ、いよいよ近づいてきていることを実感する今日この頃です。

冬季オリンピックで、私が一番心に残っているのは、20世紀最後の1998年2月7日～22日まで、日本の長野県長野市を中心に開催された「第18回冬季長野オリンピック」です。自国開催ということで、現地で競技をご覧になった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。または、連日、ご家庭でじっくりご覧になった方もいるかと思います。

私は、当時2年生の担任をしていました。大会11日目の2月17日に行われた、各国4人で行う男子ジャンプ・ラージヒル団体は、日本にとって金メダルの期待がかかった種目でした。10時を過ぎた2時間目の終わりに、校長先生から、「これから、男子ジャンプ・ラージヒル団体が行われます。日本が金メダルを獲るかもしれないので、全校でTVをつけてオリンピックを観戦し、応援してください」という校内放送がありました。子どもたちは、思いもかけないことに大喜びでした。他のクラスからも、歓声が上がるのが分かりました。記憶に残っている方も多いと思いますが、1回目のジャンプで、期待の原田選手が失速してしまい、日本は4位になりました。しかし、2回目に原田選手が起死回生の大ジャンプで順位を暫定1位に上げ、最後に船木選手の落ち着いた素晴らしいジャンプで日本の金メダルが決まりました。金メダルを取った瞬間、選手の皆さんの歓喜と涙が交錯する様子がアップで映し出され、教室中も大きな歓声と拍手に包まれました。最後まで諦めない気持ちや、仲間を思いやる姿は、強く子どもたちと私の心に残りました。教室で、奇跡のような瞬間を子どもたちと共有することができたことは、大切な思い出にもなりました。

今回は、韓国で行われるため、時差は1時間しかありません。各競技をライブで見ることができる、よい機会です。また今回も、選手の皆さんから何か学ぶことができると思っています。

「オリンピック選手から学ぶ」といえば、前回のリオオリンピックに続き、2020年の東京オリンピックでも活躍が期待される体操の白井健三選手が、1月14日付の朝日新聞のコラムに中学時代のコーチの「桶と水のたとえ話」を心に留めているという話が載っていました。「桶は、今の自分の器や技量で、水は頑張っている練習量だ。選手は、水を入れたがる。つまり難しい技を身につけたがるが、技量が小さければ、あふれていくだけ。地道に基礎練習をして、桶を広げる作業が一番大変だ」というものです。白井選手は、今でもうまくいかないときは「もしかして、これは自分の器が足りていないのではないか」と考え、器具や周りのせいにはせず、原因は常に自分にあると考えるそうです。

一つの目標に向かって、ひたすら努力する陰には、自分と常に向き合って対話しながら取り組んでいること、できないことは物や環境、人ではなく自分にあるということは、私自身も心に留めていかなければと改めて思いました。

平昌オリンピックでも、選手の皆さんの言動を通して、子どもたち一人一人が何かを感じ取ってくれることを願っています。